風俗文選犬註解

序
列傳

五岳先生遺稿
蒹葭堂秘蔵書

風俗文選

全部十卷
肯綮編 肯綮著

保保藏書

紫谷藏書之印

五老井許六先生著
風俗文選大註解 巻之壹

江都 蒹雪庵午心門人 蒹日仏我著

風俗文選序

月澤 律師 李由述

亀城の羽官子五老井の許六滑稽俳諧新古乃文章を拾ひ集めて風俗文選と題すむしやもとの文をあつめて先を本朝文粹といつり我おりふし文粹を漢文なるゝ今許六の文選を和文乃文章すて其体をのつゝ漢文よかるゝりむしようやもと詞おかしとゝ旨くみ氏中物かたりのあひのこゝろく本朝の文章と称すきものゝ今氏風俗文選のるゝ夫漢文を文字乃数を定め韻をふゝて長格まきれかるゝきゝと文章をもて文選と古文とに記する度を作れ遠あれハ漢文とてるゝ

して和文をも文字の数さとあるに韻字ことなるを去来の風賦ケ
五音相通の例をもて韻をふまる一格なりあるち韻を
用るるよりに其るゆえ共自由なる一一面後作をとゝのるに其題の趣を
よりて其作を定るを学者心得とす〳〵

江東ノ僧 律師 李由子買年於四梅廬序

風俗文選に題号和漢に対して名つけ風俗をみるにふるとよむ
本朝とつゝる同し文選ハ梁昭明太子の名つゝる文選の題号の漢
てかゝ見ひもいゝの文章ハ和漢対揚まつきことはりをもて風俗文
選と題号を冠しめらう
序をはかきとよむ系のいとにあるっ所くるのはめをかき延はなり
亀城ら金亀山竟根寺の地すて今井伊家の御城則彦根の城なり
李由許ら友ってよりに文選ら求めるまハは李由ハまりしさるを
集中断絃の文ありて二叟のすみ流り風流ハ元ら此集ら
めるはよりちらを用ひし助け補ひとるを
潴鶏ら酒器の名にて酒をつきて注さるとゝふ心なり

本朝文粹ら藤原明衡ら作るそ日本の歴ゝの詩文をあつめて十四巻の
やゝ詞 今ゝ人の目ゝ如遠するゝ上代の歌を用ふる此道の本意なり
文章一貫ゝ文則ゝ有二類句一用二類字一所以壮二文勢一廣二文義一也
設情有二宅置一言有二位宅一情曰章位言曰句故章明也句者弓
也夫人之立言因字而生句積句成章積章成篇也意
斷處曰章言斷處ヲ句ト云
毛詩 正義ら聯字分疆所以局句也

落柿舎去来

風俗文選序

世ゝの俳諧の文あつて其集とゝふものいまゝ只此先師一人おもひ立のみ
侍るゝ心よかるゝふるの希なるしらむすくやゝぬるゝ十と年余ゝとせるゝん今や
つ某の誰ゝ風雅ゝ服ふゝゝまゝ管城の筆を揮ゝく文場ゝ譽をふゝ
者すくるゝ此今此文章ゝ斧を入て始ゝ業つ詩あく終る頌讃の風流をつく
す或ら書あり或ら論あるゝ詭賦のまことを述文謀の義を残す自信紙の

文あゝて許多の作をりゝされすこれを千載乃後に施してをいこの文章の良毒と
せハ彼童子の師乃白讀を教ふる類なりゝむや此文を考ふる者ゝ此道を考る
者なり他者ゝつゝ五老先生と称するものゝ湖東森氏ゝ虚實乃作
るゝくといふゝ考ゝハ今の名望を感ゝて此文選を意さゝ免る

宝永元秋日序

此序文ゝ吉兼没するすゝ前の他なるゝ同年九月ゝ吉兼没
ゝるゝ先師とあるハ色葉乃ゝて文選をゝめる宝永よ
りゝ十ゝ年あゝ迄化ありしなり先師自選の集乃
去来抄　　去来

山岳やゝるもひゝり用乃者　　去来

山岳ゝ系ゝ陶童ゝて笈小文ゝ書入ゝとなり去来曰笈小文集ゝ
先師自選の集なり名をはゝて此書を見ゝ草稿ゝ考ゝて迂
化ましゝゝ此時かれるハゝ白いゝ白ゝ此集ゝ入ゝるやゝ何ふ先
師曰我ゝ人笈の小文集ゝ入白二句ゝ有ゝるゝ稀なゝ此ゝ吉乃
ゝをゝつゝのゝ作とゝ

管城ハ筆の名なり　今やゝ筆の誰彼　此集を用きゝゝ先師の
をゝえ今ゝ傳ゝり文義の響りゝ行ゝきゝを深ゝ

管城のちなみゝ
百川學海甲集上學齋先生佔筆ゝ云
傳記小説実を失ふゝ多ゝ只ゝ始ゝ紫悟筆を造り蔡倫紙を造
ゝれき皆必ずゝ考ゝ此蒙恬ゝ秦の時の人詩の中ゝ已ゝ明笈あり謂く女
史ゝのすゝ和の筆ゝいゝく史ゝ筆を載ゝるゝ孔子春秋を作ゝ筆すゝき
は則筆ゝ割ゝるゝき八則けゝる筆を獲麟ゝ絶すゝ又尚書中侯ゝ云亀負
圖周公筆をさゝけてもちて時の文を写す説文秦ゝ謂ゝ之筆楚ゝ謂ゝ之律
呉ゝ謂ゝ之聿燕ゝ謂ゝ之弗其考ゝる尚ゝ馬大年乃ゝ附會ゝてもちて管穎乃
筆ゝ云則ち今の毛筆也毫ゝあゝ此紫悟ゝいゝて始て兎毫を用る
のゝ考ゝ筆を紙ゝ墨を和するのゝあり則毫を以て墨を深ゝるゝ
ゝ此ゝ毛筆豈秦ゝあるゝ乃ゝん也此ゝ秦の為ゝあり筆を紫悟ゝ
造ゝ此ゝるゝ乃ゝ況や崔韶ゝ古今の注ゝ紫悟之筆造ゝ枯木をもちて笈
ゝ麻毛を柱ゝ羊毛を束ゝ兎毛を束ゝ管ゝ此ゝる時八則又豈

兎毫紫恬より起るといふ百ゑんや此端說を秦の筆とつゝ一句まうして
以て後世をあやまてるゝ又蔡倫の如き則後漢の時の人なりと云うも
その外戚傳ゆゑ赫蹏といふ小紙也則紙の字なり恐らくハ亦蔡倫
うけむる所よりあるハ紫恬造る所ゆ世の精工なるゆゑなんあらん
紙筆此二人よりはじまるといふ則不可なり
紙を後世より製う方を弁を切蒐の如く割り刀を利り牛の草を用
てあとつゝ絲くるより古書を簡策となつけゝ
或操觚以擧爾 或含毫而邈然 觚ハ木之直用之為筆
韓愈師ノ說
彼童子の句讀の所
彼童子之師授之書而習其句讀者非吾所謂傳其道解
其惑者也
讀書の法ハ先句讀を明るまゝ句讀明らかなれハ文義自ずから
句ときとハ句きり也語の強る所を句といふ語強されハ文の屬きれ
長きわゝ其中のきりてよまむわゝきりてよむを讀くゝ云唐
の人ハ此句讀斗にて文義を解する也句讀を安く句讀を擬ト

いよ文章の義理句讀よりてかゝる也句讀を緊要とするなり
吾邦の人ゝ倭語を用ゆゑ示袁彼之義理をとる故句讀をゝ
ゝれゝ大畧其義を通するゆゑなり

風俗文選序

ちゝゝゝ文選あゝ時ハ吾朝より文選ゝんやとゝゝしゝゝひて伝ゝふゝけゝ
湖東の武子許四方也凡文章ゝ周孔の心を傳へ莊孟の筆より藪章せゝ
ゝ其心ゝつゝかゝゝゝゝ傳ゝるものゝゝみまれ也人ゝ其姿ゝつゝふ
ちなゝ姿ゝ世ゝゝゝ変化して其変化を志ゝる人ゝゝゝ姿を志ゝる人ゝゝ
いふまれ者の人の中あるをまゝるゝ道ゝつゝふへき心なゝれハ姿の変
化をまゝるゝ人ゝゝいふ変ゝ世ゝゝ源氏物かゝゝはゝめ張あゝゝ
ゝまゝゝれ人の中ゝ於ゝみ而乃ゝ為ゝゝゝ狭衣ゝ歌ゝあゝ
ゝゝゝゝゝ竹取おちゝみの中のゝゝみゝと清少納言ゝ枕草ゝゝゝ

毎年おひきつるよ おひてをしめ給ふあるせむとせいはいて業花物語といへる
ものを我はまことをもちよくも書きしは伊勢物語の言葉をふきしるしたる
左記をまことなりの日記をおのれのあるべきなれば人のなべてえもぬるものを
我をのみてをもふらんと記と紀と同一心なるべし旅の紀行といふるべあるべき世
に平家物語といふものありてひとへにものふの武勇をあらはせりとて 祇園
精舎の鐘の声は是為のあるべきを源氏平家物語とつけるべき名を物
に對しるべきなるべし略の行りしら方おの記はあるべしるべる人多く俗伝集といふ
ものらさるべきものなるべ俗べめるものやや四季物語といふものあって其人の作なる
あるべしるべ撰集抄のいとまこそふるべ歌の心のきはくらるべ八まして撰者の
法師のあるべ人庶なるべし兼好法師のつれ〳〵草らるべるべおるべもも行るん
ら硯を用ひて物をかくめるを世情の境国はあるべふ合点と見るべるべ或ハ宗
祇の後為の花は或ら長庵の蓬白集はおのれ〳〵心はあるべしてむしの安代
つくべすべいふものなり天ら色をもて用はあるべ地ら色をもて第は拙
ふ竜吟すれハ雲起る虎そふけハ風吹つくりてあるべハむ先師常はいろ〳〵漢ら之乎者也の四字をもて貴

賤尊卑の詞をまっち和はハ系遠波の四字をもて暑〳〵源〳〵の時宜をと
のふ文章らまってを示遠波のるのなりとそされハ一日の長短を志ハ二日の日
讃をもるまれハよるも者息のつぎ場をもすして海雲海嵐腸とすう
つけ〳〵んはてるき心やすんせら兵そらるるも拙ひみそられても遜
ふ中は我ら代文選の附を四ゆて拙ふのるべ〳〵とう

宝永元年　甲申睦月日

文選梁昭明太子の周養漢より梁の代近乃文を集て三十巻の
唐李善ら註は五臣の注を加へて六十巻ら
岩白集
源氏物語とて世はるもてやは五十四帖の草子をやらんこころみは行ら
そとくりひろけてそんしるる系すちのはなきやうまてさるは
よみとうに侍るべらいにとふさし兵到よのちるんすて四ハさ
るるもまひらをてるべているべ六月中いとあつきは日かけをまの
き系るん人のちはは入てらやるのるつのさるるうまてるの色るの

あやめもしらぬ様をもてるものしらくなれいにしへの彼らハけ調なと
こまうあ[illegible]わらるゝ姫〜ら
分我らハ文筆ハいつるゝ都ての文章いくなゝらうらくよみん
ハおのつゝ文意をあくゝるゝの也おのゝと其文義をほるゝいと
きハ意をえいよ〜深うほるゝ〜ハ文選て他者をうるを志しめんとて
ハ序ハ代てのきい草子物語の題号をあけて文をつくるゝ
検校を大臣三位他うつゝ物語三巻と三十巻と表部あり外うゝ物かう
二巻ゝ[illegible]おちうゝ丸巻枕草子十巻栄花物語十巻いせものかう
ハいゝ世物語といふ土左日記二巻平家物語三十巻みこ十巻の
ものゝ長門本其外あまゝの方丈記略長明ら発心集四巻よゝ
かう撰集抄九巻宗祇絶馬紀一巻巻白集九巻
源氏物かう一部皆寓意をいひうゝ〜ハ心ゝ世の人の色ゝみ
ゝよりてのゝふるゝを啓発をかゝ[illegible]ハ[illegible]ものかうを天台ろ
四門ゝ表し或ゝ不可説の物能ゝいへり

風俗文選

自序

文ゝ貫道の器也孔子も余力あらハ先を学へといへり吾朝のむかしよりハ大和詞
の文筆庫ゝ[illegible]ち車ゝみてむさしと世ゝおこるゝ言葉ハ男女の筆
にて源氏枕衣ゝ[illegible]ハ男女の中をつゝ實ゝ歌ゝのまひへき道ひきゝ[illegible]
其ゝ歌連歌の文法ゝて詠諧文章の格式一言もう先師芭蕉翁始て
一格を立て気韻生動をあらハせり[illegible]ゝ心ゝ苦
ゝ龍田の花ゝ[illegible]ゝ和歌の浦ゝ志をよせて雅波ゝの細さゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ縦横自在をつくゝ[illegible]ゝ意をゝ[illegible]
童蒙ゝ[illegible]ゝ物つくゝゝ落て果ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ今ゝ[illegible]文章鮮ゝ[illegible]
章なゝ[illegible]ゝ門ゝ[illegible]
寶永二乙酉歳自序ゝ風俗文選とハゝ

文ハ貫道の器也

古文後集　五老井許六

集目　魏ノ文序　李漢

文者貫道之器也不深於斯道有至焉不也易繇文彖
春秋書事詠歌書礼彰其偽皆深矣乎
誹諧文章の格式一言もなし
もへハ女文の筆すてを
我に許すまゝ文選を見るめる趣意をいへる文段に習ふ女
者は文子なく歌の語をつくりあつめてあそふあれハなん
それいまの文章をあつむる者なかるむや後世の道ちるべし
且今の世のもて拾ひし芭蕉翁没後十とせまなりぬれ
ど其つく人もかれいまたあれハ道の塵に行かるを後世
まで見しめ且は初心のくるまに文章をつくるへきたよりなる
とあつめ見らるゝものなり
文質之道交轉シテ無定
文聲婉轉而豔媚　質声淡薄蹤散也
五老井の別墅は中仙道高宮宿とある旅宿の西より京村といふ
ところにあり其丘を五老井とよふ井今に有許六没して此
所も荒ける塚ハ丸き石を立て墓印ハ石楠杉の木に植し升の為ほ

を建られき
雀約古今註曰堯設誹謗之木今之華表也以横木交柱頭
古人亦施之於墓
白虎通云庶人無墳樹以楊柳古葬者松栢梧桐以識其墳
童蒙抄云山寺の南表は志やくなけのみちをあくまこれを志る
のつりやと字されハとひの木となんかられハ坊ものよめる
ゑ志さてぬられたれし志るさきとひの木とハいふなりとすつる
井子五老井許六　芭蕉翁の門人なりと也　くるなり
むしより和歌のすすみてハ師匠を定ることなかりしなり能因絵師
家系の長能を師とせしより歌道にも師弟子といふ事あり
此ゆく遊てつゝれる和歌の乃かいける上に附るふるなり　長能
気韻生動　　畫品有六法
一曰氣韻生動　二曰骨力用筆　三曰應物象形
四曰隨類賦彩　五曰經營位置　六曰傳移摸寫
百人一首古説　かる志倒著

後の人源氏物語の文をなぞらへて序をかくいにしへや物語りの結
の文なり序ら序の弁あり男ら男の文女ら女の文あり此物語かふ
みなり心はせるてしかも源氏狩衣のうへをまふみて謡謡
布我ら此序をいつる物ゆく源氏物語の序文章つくりかたをよく考へて序ら
文章の格言なりといつる序の弁あり男ら男の文女ら女の文あり源氏あからさまをふみ
なりとも閑雅のいつる誠に格言なり許なるら序をいつるとひとし
をきなりといつるらをいつるの文章あり夫をうひらを文章
をつくるきたりなるせらるべし

大註解自序

風俗文選一名五巻文庫ハ元禄の頃迫ひ出る高根の
雪士五巻井許を六巻芭蕉翁の骨髄を伝るいみでお
大和魂もてあつかふ名ゆへ文章躰ら二十　文ら一百
十余篇皆く謡謡文章也百七十余年の今ら
侍て謡道の文章ハ悉謡ものらひ一書の
外ら有るなし　玉とやいはむこがねいはむくら
かへしくつらて其用きハ意をうるへしまれど種くの
文のうち高きをいやしきを古よりよみよろこ
へきを此つむつきあるハ天地のきハまりを邪村
里の為よりいふるら人倫の上より為ハ為ハ

手習のるにいとう解しかきもるまゝ初学むの人此
書をよんでをいとの文章をつくるべきものゝ世むや
おのゝひとりとして解しうめるものなとて先生亡其事の
迷惑さに みを我いとゝあきれるの古よりみかいさるの
るゝせみるの書あつめたるものゝ先紙引あて考ふ
らまゝ仏ゝや仏ゝむむや山崎乃宗鑑法師のつく
れるゝみ蒐集る仏ゝ戒くらゝ大つゝは集とよゝ
此書の註解此書を作者達の心を含へるや含ぶゝや
よゝ含へるゝ含ぶゝるもの仏ゝるもの天なつけるの
風俗文選大注解とゝふゝ

嘉永紀元戊申三月　芭蕉庵樹青翁門人
甘雨亭仏我七世孫
佐保姓　葎甘仏我

凡例

一此あけて考るせるハ本文と考るゝ一くゝりさけて考せるハ
註解の文と考るゝ
凡文章を作ゝんとおもふ者ハ先其道を考ゝ道を考るとハ
古人の文章を熟讀（ジュクトク）して其語を謫（アニキ）記ゝ其文理を解すしら自
然ゝ筆をゝりて文を屬（ツラ）んとおもふ心起りて何ゝも心ゝあるゝ
文ゝ著作るゝかゝきこと仏あゝ考られる文ゝ體（タイ）あり法あり體
なゝるゝハ文といゝ法なゝるゝハ文をなゝ仏體とハ體裁（タイサイ）なり
如ゝ

引書ハ万葉集より代々の歌集にいたり物語の類誹諧の書にいた
りてハ此文選と同じ時代の書を引用由是ハ同じ時代の人の文章を
あげて本文の意を志らしめんとてなり又雑書といへどもいさゝかも其文に
拠あるハ引用せ又口つから傳へし誹諺なりとも證あるハと
いへども元禄の昔よりいひ傳へしなりハ引用て於るに志の類 我々
友より口傳へしるハ其庵号姓名をしるしハ我々いふ志ますハ己か
志せ考ありて強ていへるにあらずハ饒舌瑣𤪗とするのそしりまある
べしのちの正しき考を待ものなり其引書正しきものハ書名を志るし
雑書の類ひハ其名を志るさゞるもあるべし
又其物のなり其ちなみなる本文にあつからざるも初学のひのべく
のたよりになるべくとおもふものハかきあつめハ季よせの題意等の解
きのせたり我が老婆心と志るべし
祖翁の門人多しといへども其草ハ職の隠逸にして書を著さばつべきも
とめよりて其句其文章多く傳れ嵐雪も又其草に似たりし其門人
みて句も又集に出るものと定めハ去来に名序を好まハ著せる

書もおほし 其角 許六 支考の三哲英才にして文章發句集物ともに多し
三哲ハ実に誹道の遺物なり其あらはせる書にいたりてハよしあしさまざまあ
らされど嘉永の今にいたり元禄のむかしよりそのいはゞの集物名のみ於
て其書の亡るもの いくばくをやさらしと支考の一哲のミ其あらはせる書あ
まりなけれハ今の世にも多くのこりて其著をみるに足れり此哲のうちな
すのなり引書に用ゐる 作者の名字みな其人の行跡ありて證とする
になれり況まにいはんや許六去来があらはせる書に似たるの集ハ偽書なり
といへるはあらざれば是らに其書をと祖翁に傾のみ名字をかきしし
て世に衒る心ある書をいへるなり 春の日冬の日さるみのなどは
祖翁の筆を入給ひぬる上の集なればいまに對して偽書といへるぞ集中
の句ことごとく偽りといふにあらざればこれ其偽書といへる書に
拾ふに志のびハ引用ひさるもありと志るべし
誹の字集中言篇人篇ともに用ひめれど本文のまゝにしたがひ
ありとも本に用ふと志るべし

仮名よ古体近体あり古体ら万葉集のこゝろを近体八定家卿
の歌所のゝりとなるべしこゝろをいふこゝろのまゝ季吟春芭蕉風
をはぢめ近体の仮名を用ひらるゝ文選もまた近体の仮名
つゝひなる事あるべし古体の仮名をひらがなと文引書とする仮
名よおのゝ八一字をもはぢめ原本のまゝとゝまる
跋ゝ汶村ノ風俗文選仮名つゝひといふる仮ありそこる一部乃
仮名をひの近体古体をらちといふ

風俗文選大註解目録

前編之部

巻之壹上

作者列傳

同下

辞類

柴門ノ辞　芭蕉翁　許六
示二秋之坊一辞　支考　甑ノ辞　李由
送二新道心一辞　大草　示二古鏡一辞　嵐蘭
鉢叩ノ辞　去来　焼レ蚊辞　許六
四季ノ辞　許六

巻之貳上

賦類

南都ノ賦　汶村　鎌倉ノ賦　許六
吉野ノ賦　丈艸　松島ノ賦　芭蕉翁

同下

富士ノ賦　嵐蘭　湖水ノ賦　李由
前磐山ノ賦　支考　後丸山ノ賦　去来

巻之二

賦類

鼠ノ賦　去来
揚揮豆ノ賦　毛紈
閑居ノ賦　沒村
旅ノ賦　許六
四睩廬ノ賦　李由
招魂ノ賦　支考
百鳥ノ譜　支考
山水ノ譜　百花ノ譜

目録終

本朝文選

作者列傳

芭蕉翁者伊賀之人也武名松尾甚七郎奉仕藤堂家壯年ノ時辭官遊武州江戸風雅為業號桃青乃誹諧正風躰中興開祖也嘗ラ為遺功修武小石川之水道四年成速捨功而入深川芭蕉庵出家天下称芭蕉翁遊東西南北説風雅助諸門人國中悉歸芭蕉風一ヒ遇難波津伏病終卒ス年五十一葬江品義仲寺

俗名為七郎忠左為新七忠左為詰ス多ク又松尾與左為母後品字知好の産枕地氏の女なり實父ゝ伊賀上野鉄炮鍛冶松尾甚兵衛なりとつく

又正保元甲申年生元禄七甲戌十月十二日於大坂卒す春秋五十一

翁はもと江戸番場江町名主小沢太郎兵衛方ヨ頭陀をすしのち大工杜幾ヲおの号あり小沢氏ゝ俳名ト只とつく

桃青翁ゝ名ゝ俳ゝ名ゝ小兵衛ゝ常ヨ柔色のつむ

き羽織をきられう
給るなど文ども　元禄七年九月廿三日の女亭にて歌仙を餐亭あり
かうべめのくさひらの毒よりやうやう十月ばかり病て日十二日辛酉
朔のあり七日近くなりぬとふく
八日本節去来より中る八今朝出脈を伺ひて汝身よ気力衰へ胃の
力なくて脈作弱し心をつくしたまへとの薬力とかひ弱くい治方を他醫と
ものあんとおのりふ去来仰せ中ハ日本節ちゃ亦忘なしともいふる仏方れ
を虎口竜鱗を醫はるる天業をいむう世む我かく悟道一伝ハ我ら
呼吸のかよひ人男らいつ迷ものを本命の神法を服せむ他る求る心ものこと
まひりる風流を徳人皆男分必するるなり支考と加れ去来ものきさ
れハ去来心ゆるく病床のきりんをとくひてやてき去来ものう諸名の宝匠多
く大期よ辞世ありさいうの名匠の辞世をなりもと世よつふりのもある
十あいれ一句を詠しおく諸つ人のをみてうぬ一ハ日きのふの餐日
ものを今日の辞世今日の餐日ものを盟の辞世我生涯いひ拾ひ句一句とくく
辞世ものをさるハ今しものを我辞世をいふと写人あるハ汝ものひ拾ひ

句いつれなりとも辞世なりとやたまはれ諸法従来常示寂滅相ぞれ釈尊
の辞世ものを一代の仏教ハ二句より外をふ古池や蛙飛こむ水の音ハ句
よ我一風をおこしよう初て辞世なり其後百千の句を吐よ其意なり
さるハ今ものを句て辞世なるきるハ今ものを句なるなりと法華経ハ傳よ
りを注ハよものをうひ息のかきう語るふけ語実よ微妙の九人
なるものを句一一　九日人くの百年ものを生ハ日
垢つきくる不浄ものを脱ふ一よき衣よ百年ものを生ハ日
赤辺地波湾のほとりよ草を敷塊を枕ものを句ものをるき
分のかるるるくしお待の上よ来ものを来迎の友ものをにきしく鬼禄
よ上ものむ今生の本望也お草去来ものを此ハ句ものハ歌
まふと薬一入て吾角よかせうを詠しぬく
旅よ病ものるる心ものを一待ものいつれなるきれを辞世ものあるハ辞世
枯野をとめるる心ものを一待ものいつれなるきれを辞世ものあるハ辞世
よあるものあるものあるハ病中の吟ものを一ものをかる生死の一大事をおる
なるものいに生涯ものを一風流ものハいひるるを毛を執ものいるるけ

むかしからいへり去来云たまへるあはれ日〻朝雲暮雨の間もおかれは山水野鳥の声
も捨すあはれ心ある風雅なりとさるなく河魚の患につかれあはれ今ハのかきりに
其風神の名章を唱へなからも諸門弟のよろこひ他門の嘲へ末代の亀
鑑なりと涕すゝり泪を流し眼あるもの是をみハ魂を飛さむ耳あるもの
是を聞ハ毛髪是か為にさかたむ列坐の面〻感心慨悲想して慟絶して
声なし是師一代の遺教経也此日より猶おとろへたまへり
十一日の朝おもひかけなく東武の其角きたる是ハ東武の涯役国伊勢より来
宮の浜より和歌紀南をすゝめて泉南より浪花にまて入しか所〻にて師のいたはり
おはしますときゝつけて夜をこめて早船にやとひかけつけてけり師の病床に来りて
皮骨連立しおもひける雑をえしまぬ世且悲ひ且よろこふ師も其やへのひとる
白を見て唯〻泪にみちたる其角も言ことなくさしうつむきたりしを去来
支考其外の衆次の間にまねきて病症の始終を物語り此頃よりして物も
ひとしるまも物語なく此度の時比より師篤のすゝめくる粥へ露をのまれみ
たまふくらはしさかきりなく浴中をなとまゐらひとく焚あけてすゝめまゐらせ
中一のさ捥そこ妹くめきれいよく鏡に来の人にはなり土鍋にかけるを

去来柳なるこうしみて押いたゝき
　病中のあまりすゝるや冬ごもり　去来
去来曰此句を他門のもあはれみたまへるをはすまみて師をなさめまゐらせん
此葉し侍りぬとよみたる所にめへ惟然に扣正秀をテハすゝめて一つふくさものゝ
をり祈りにかまはくゆるまくり後朝はいさらあかて果たちおりしと扣
しのはすて其ゝぬを見ひは笑ひ合し
　ひつそりて蒲団に寝たき笑ひ声　惟然
　おもひよる扣御もまくしくさゝらり　正秀
一坐是をきていつれもと見て笑ひけれハ師も笑のさゝへくらはしさかきり
なく十日之来の兵まきなるとつ時雨なりけれハ夜とく晴て日和さしたるに
蠅の多く日南にむらかりけるをさく糯（モチ）にて蠅をさしとらす上る下をあ
るとてんのひて去ていく是は入のひけれと大病中のなすれハ忽ち傀のひて
支考等ひ入なふ支考ら師の発句を滅後一集せん心願ありと此比
の病苦に悩みなからの人会せぬらゝ今きんよまるなあてておゆらん
と去来申すかれハ去来ら加すて師の心中を知らるゝ故たるにいかり

小さうきるとやさしきものゝ腎の平生あるまらきるゆゑ今日
やゝやくはき舟を見うけたゝ諸人くるしとおもふ中より氣を遣ふ
るゝと呼せやてはんを学しめやうの奇怪なり此後此看病巡くより賜
ふふ〻共使とゝ立のゝと声あらみよ次の夏人迷立ちまち考も半
らんのいひあて諸よの中奇西日をしなひう惟然よ和ひ我
よるあうをとおきゝゝいひのく

去ゝとて次の夏ゝ立ゝ　去考

されうを考なるるれい師丈草をかうのひう

家とうて芭蕉ばたくうれ夜俳小　本節
なるゝみのゝ〻ゝゝゝゝ　乙州
うつくゝるゝ丈草のをこの水　丈草
吹井ようゝ踏をまゝのんをつゝゝ　芭角

つゝ惟然吹弟ゝれい師丈草うをを今一度ゝのみのひて丈草ゝるれ
よういつゝゝて寂ゝを調うう西ゝりとゝいうれ一意うてゝめのひうう
いつるかうゝきんのるはきをとうゝひるよ本節人熱をいゝける

舟よゝえうれい芭角長故をつゝ本節ゝを病よ傳中の証といるゝ大病中
他食ゝるに俄よ食のすむるあるゝ熱症なり死期をきよあゝるゝいう
ゝゝゝゝゝ会ゝめきゝに却中より又寒熱往来みて却れより
顔色土のゝくゝえのれゝゝゝゝ倒れゝめひ人もえ知りのゝゝしうゝみを
又実証なるめひ左右る舎羅香舟ゝうれい師丈ゝまゝゝせく
介抱ゝ徒ゝ却ゝれゝ十二なる薬て実ゝうめひゝう後てゝの傳ゝもう
ゝのゝゝ芭角吉来丈草ををゝて向ひるゝのひ稗をゝれれい路丈
ゝくゝゝるゝゝゝゝ行水をのゝみのゝ本節ゝきゝるゝ制ゝれゝゝゝゝ
のゝみのゝゝゝゝゝゝれ湯をひうせゝゝゝ空を踏ゝ路ゝ本節ゝ
醫術をゝゝゝれゝゝゝゝゝ例ゝ和ひ人の家を迎ゝめゝれ乙州
正考をを左右ゝゝ考惟然ゝ弟ゝとゝゝゝゝ孫のゝこゝゝと遺言
ゝゝ病苦ゝゝゝゝゝれ人ゝ奇異のゝゝひゝゝゝ仔賀の遺書ハ
ゝゝゝゝめのれゝ京江戸美濃屋張ゝれゝゝゝゝ遺言張ゝふ
ゝ路長ゝゝ人の中ゝ弟託ゝ次ゝ声ゝゝ嗽喘ゝゝゝゝゝゝれ
ゝれい浪ゝゝ素湯にゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

のひ給ひ元貞永阿署梨（アシャリ）より路通うるを作る其居泄り法華乙別ふ手
送り清息嘉霜こ八文拾貳（ぎょう）ばおしいたてるこをて雲井の宮所
うたなり作ぬ彼う教年の苔水の労ためくりすれおうに我亡骸ふ八およそ
よえ給ぬうに邪流交りぬ（ぬ）ひ給ふ諸ふる僧へ（へ）ふりしと気
絶のひて余三ヶ日合掌西〳〵観音経ときこえてかすうよ（よ）て息のか
よひをくなり申の刻ふ埋火のあくまりのさむる如く法師なりて
きまゐせこるよりかりて春入りひぬとあるふるとる正念うて絶る屬（ぞく）
纖（せん）よつぬ（ぬ）ひうて時元徳七甲戌十月十二日申の中刻に寂五十一なり
即刻不浄を清め白木の長櫃ふ納めまゐる世其夜まゐ川ふ入て伏
見近辺偽〳〵奉る其人〳〵ふ八其角去来丈草乙別正秀木節惟然な
ど道吞舟法師なる人〳〵花を仁葉ふ京〳〵茶物を送る伊賀
長櫃の蓋ふ花をとり美〳〵念佛誦経おりひ〳〵ふ供養〳〵奉る八
僧をとるれおるきふ〳〵とめるれるに信者由のうめる彩ふ合
ふらいさて手ふうつわるるはうるき物語て彩ふ京ふ（ふ）て
まふ狼吞運ふかりいそきふ〳〵ふるる十三日忌の附ふるる

大津の乙別ふ宅ふ入奉ふうふ乙別ふ伏見ふ先立ていそき帰ふさまを
掃除〳〵清め沐浴の用意ふ沐浴ふ立道吞舟法師ふなり山聲の響ひ
させの〳〵八月代ふて丈草法師ふ書状ふ書遣ふる浄衣白衣ふて召させふ〳〵きを義ふいうるるや兼て
茶色の衣裳ふそふふとふて茶色をめされふ八袈裟屋の斗ひ
ふて浄衣ふ茶色の服ふそせふる如送葬ふ十四ふ定ふかを
ふ日没ふなりふ義仲寺乃真愚上人住職なれ八導師なり
三井寺常住院ふ寄ふ三人ふれ讀経念佛あり山入棺ふ其夜
西の刻ふ葬式いよ〳〵十四日酉の上刻ふおきハむ豆の内ふあつまる人〳〵
は雲霞の如く悔ふひふる人数凡三百人余ふるふ迫ふ人あつまり
男女近おふ之ふ〳〵む中ふ義ふて遺命の通ふ本ふ食の右の方ふ埋
葬〳〵ふりふ十五日去来其角はめ勝而大津の人〳〵ふ誘て詩て先
ふて土かき上て卯塔をかくふ寺ひ塚のしるる年ふるる柳ふる
其ふて〳〵て山房の形見ふて指〳〵の芭蕉を一ふと萬て植ふのひる茶
の木の人ふを聖ふる花ふ作ふ〳〵指て弁ふて拾ひひて香花ふ

四ありしのちと度といふて生あり其名豊芦原の浪のひきたの德
芦葉の徒頂の詩ふ人也赤人のむかしらいさをしの末代のをしへ
實に我義ひとりとなつて

為先生遺状

此先生俳諧念仏ハ如何様に工夫仕候哉
被寄此心弱ハ俳諧を無ハ
俳道ハ意専老初年残ハ心ハ
まとを有ハ迷ハ
十月十日　　松青　立

松尾芭蕉翁

俳諧ハ雪芦ハ　俳道ハ　苦藤ハ　意専　猿雖ハ
十ハ　年残ハ　まハ　土芦ハ

江戸平田明照寺律師李由の跡ハ傳て祖義真筆寄崖寫し
芦ハ花見顔ハ崖ハ

花ハ　松ハ　松ハ　ひそ　なま
宵ハ　や　声　鳴ハ　嵐ハ　笠
秋ハ　まハ　笠ハ　末　細　や　迷　庵
笠ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

芭蕉を　や　伊勢の　ハ　俊
芭蕉を　植る　緒　あ
芭蕉ハ　植て　ん　ま　む　萩　の　二　ま　ハ
六助　ハ　ハ　の　二　人　ハ　ま　ハ　ま
翁ハ　て　て　の　ま　ま　ま　ま　ま
ハ　千　宝　ま　ハ　ま　ま　ま　ま　ま

猿雖ハ翁
ま　く　の　ま　ま　柳ハ　仏　て
伊勢ハ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　代の春
ま日の　雨　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

梨の接穂や　山　ま

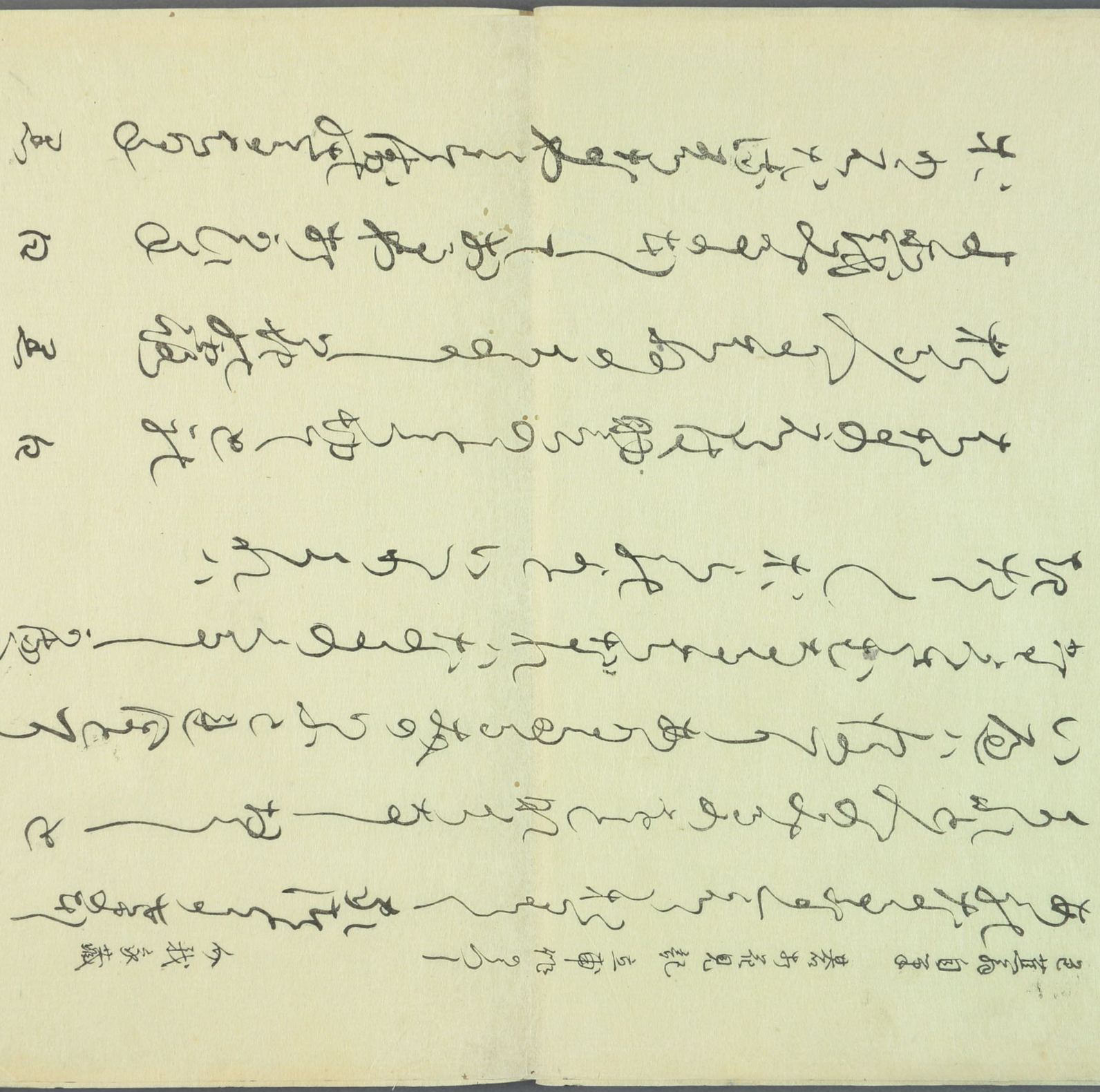
題杜鵑

笠の緒よ柳縒る藍ぬの郡
古履や花の藍ぬの捨ひ履ト

相国寺

雪ちる成四あるる井乃林こる
春風やきせるくくて和泉屋
古寺の梅千年ふむ男こるみ
笠主といふ小僧ふらん白梅
雪ちるの落むさきの芳独活下
梅折て捨ふ毎ちる車
逝水や橋流く井の奥
くれ迄き四谷ろ紙草履
尚白と浪花ろ
ふひとあ都よ者ろ木橋こ車
あくさに乃ふや玉戸の渡庇
鶏冠の画

夕風や盆てくちんも 鶏 ちるも
行共代ち迄ち四ふ鶏人ち
七夕や深況ろ 餓 藍
名月や伊勢の白子の庇きし
燈や路脇ちき遠干 浮
淋しさや釣ふかけるきくし
くいて義穂ひろむ実ろ
雲雪の四ふくちる海
張烏 二百十ち 紅葉
角髪や夏ちいのすひろ
背茶やかくくくち 除の売
いく秋 一足のすちて蟹ふかくれろ
義ふくつせち祖義の自筆ハ碁打花見の記ちて雛を立甫義ろ
仏ちを概青義のかちを巻ちの人情いふお返きて侍ちれ中
の文章廿六くくく 変句廿七句を存せり 此油物ち我ちち



乏む共中ちうつして国し心の人との一覧を備ふ
分我ら家職簿を綴るを本とし祖父分雅父魚行とに
古画真蹟を好く是を賣買して家業の助とせり此巻物文化の始
の比買ひとめて他く賣渡ひるの五六年のうちに三雅ら
方く買ひとめたり分雅分きのおもひをうり其後我家の所物と
して今之前時ちう分我又家職をうりをいうをなみ家業の
いとまある時のうのみ人道を志ある人道をとくいたく誹謗す
道あるを言て其道を導くもちて祖義の徳をむくひ
て遠ら祖分我ら道を志ゆき志をつくのと
我家業を正月のはじめ家作を立て忌を笹看板といふ其はじめ何人
の建はじめといふるを未不考弁ら則簿也往古弁と伐て簿と
せり力をもてをうあらつ為て簡とせり笹看板則帳也

浪化者東門主一如大僧正之連枝也號慈真院居于越中井波瑞泉寺
一日逗洛會芭蕉翁效風雅後著省儀海前後集病甍年三十二

号雋〻山人示寂ハ元禄十六年 癸未十月九日

浪化公俳写記

今日神無月九日ら物のかなり此月ハ別と世日をそ口すれ
すれ中異ある故かいさめ物の倒るるを心の倒るるを我義の慮
花を神山をかけめくるる心の風をもさらひ雲をよひてそハ月ハ
せむ月すきくて此道のやつこをむまれきをハ雅行のつゝものこま
しくや此心のあつひら物さめのはせをまのあらうあるまの
りにとるかやうるらいひのぬふと今の生死をものおよるをい
うて分の上をはゝひぬハさゝむをるつ孫さるゆうてひ
日此居を去るら道を斯文をうゆるといつる三越の人のなけお
るゝさゝむやナとせのむゝらかの為と倍の東花坊うてかをめの風
雅をむすひのりしを浪日を道の虚實をかとらひおこゝて風雅の
籠あけんとハ智立ぬをこうる法師をそうかの塔る越人ふ
とをかゝをこゝをちう終めて其朝のあやまをてかくへゝの日
の為ものをさく彼ひの渦まをへをめんまをたうひるさまく

せちも世にあはしきハかく八声してうち綾女とやみ山の一集ら
遠く八将の外の心をかよはし　この花のさとにおふ日らぬかくお
しまつまに筆とりかけてつひもわれにえくまひのつるすもされ
その花の雨かけのこまくの洞らいへぬへし　下呂
全文に文採りにけり

郭公　山田の子を急々て　浪化
声立て稗のむれのある早瀬かな
きつつきと思ひて谷の小寺かな
秋立や鷺の増毛のさしのまり
水鳥の胸よりけむくさくらの御
東笠に蝶ひきのおとりかな
　芭蕉翁の常にある行脚もまことや
　稼ぎて甚ること十け甚人をたすくる
早稲の香いや夜なめくりの桜の綵
はるかよしなきとて秋の中ふかき御
名月やはつくく郷の　儀君

寒山忌とは何かハ翁主のいのちの山
のこ猪の声もつきるや寺この門
菜畑や隣てり合ふ桃乃花
一本をくろうくと花見かな
かたむしの婦より蕎麦の二星かな
種麻やくるりと綯るやけ畑
　三月十二日義仲寺古翁の塚に詣て
陽炎や苔のつきそふ墓めくり
二三日阪屋乃匂ひや子月やみ
常なし　細くせまくも若葉かな
秋海棠に何を陽炎のいきかな
麻荒をふみお皆戸の鳥かな
極楽をいつも月夜の十夜かな
時る雨のかしらを晴て来る
大空や傳の鼓る　吹　会せ
　句空法師が山寺に来りけるをとゞめて
豆麩こそ冬のらいく山をゆかしきに

時雨らゝ鬼もなかりけり　句空

去来文通

さくらもかへりかけたる小屋かな　浪化

浪化公逝善

とりまはし法顔定し此寺子達　許六

僧丈草者尾州犬山産也壮年辭シ武出家隠ニ松本山上ニ蕉門之騒客也能ス詩ヲ後三年閑閑シ而終ニ不出病死ス常ニ讀ニ法花經ヲ

年四十四

翁の上足丈草法師

東齋随筆に清範は空晴法師の法孫己講の上足説法無双にして文殊の化身なりと

去来か丈草の誄に云　今ハきさらぎ末の四日月は常盤の如くにあの

禅師かよりわらひを湖南の正秀かもとより告されたるを聞あへ

うち涙とあへるゐぬ　つくし此人のむかしをおもふに尾張の生れ犬山

に仕へて勇猛の名をあらしとかや

今哉に丈草か誄才ハ晋阮籍に似たり同じ誄に云

其後洛の史邦にゆかり五雨亭に仮寝し先師にまみえてめられし

より二更の路全の内に頭をおし並へ四月の史鏠の上に西をさし

むけて吟會多く此人をかゝ先師の言に此僧此道にすゝみ学ひて人の

上にとむる月を越ゑかはとのたまひし其下地のうつりきたる

うらやむへし　志ハ風性にくらしみて此のふるすとぬすまれ感みて吟

し人ねし誄し常に此るおもすれくるか如しと

晋書曰阮籍字嗣宗屬ル文ヲ初ヨリ不苦思率爾トシテ成ル章ヲ

死せんとまてか都乃あとまれ　丈草

夕立にはしりおるや弁乃幟

旅行

帆立て帆にかゝる袖や夕すゝみ

かけひろにあくまて待日のかけ

風雲や時雨とくくる比良表

法山のしらゆきかさなる竜の上
遥巻やありつむ嶺の雪の松
一方ら菊の香ゆかしうれう郎

遊長命寺

笋の鮨を喰おせ法とぎ
夕立のかしら入る松ぐう郎

孟郎観松遊

数はかぞへしのきをひい床のやま
降まる魚のまこうや 鯛と 鯉
聖霊を 仏 むかりうせの旅 北
木 啄の入まつろう 藪の松
喰うれて目さもうこ 庫の飛
みゝ山をつこて至うう 月の者
去つ山て 松をまつる 松を郎
宅ら山と 戻る 喰きくく
や稼ふまこの 海を 飛ちむく 河ふ
年 黄 ゆ あ ら ま す や 梅の花

庇ら、岩よかけうう花むしろ
すゝさの山ろう 芋 深
雷おつる 松を 松 ろ つ ろ
納豆するときれや 岩の雪 乱し
和嶽峨や 町をうち 城 庫の声
一と 松 さ 物も 年 ろ も やけど 外
堂 ひの 外 蒼 ま ふ と う 郎

芭蕉葉の ち く も う ひ く あ う ま
物 を 庵 と 偶 長 て 巡 ま へ ま 郎
去 来 ま う う く や き う

鶏もや 茅 陽 の 法 の く す り 鶏
ふ し

新雲や 人 参 つ ん を 墓 ま ま る 去来

大山之像 謂二句

風 萱 る 羽 城 ら 徳 る つ ろ る 為
さ う さ ま る 扇 を か け て み 浄 し 去来

僧千那者江州堅田産也居于本福寺釈名妙弐上人嘗任律師
號蒲萄坊蕉門之高弟也

享保八年卒七十三歳

まゝこのおもりの形や梅柳　千那

海山の青む夏かや生ル度
水そこの月ひるを吹る鶏の声
おもひ寄らぬ人や月やなを入れと押やを
如月の色坊のかゝまるこゝろやうの燭
蛍火て三井の鐘ふる
言外の新意ふるきはしら
春月やそこもよ徳をもれ笠ふる
蒲萄棚〻佛の立かゝし
夏食の酒債と名ひろう
人を吐息をするこんをうう
新迎き岩梨あるゝ猿の笑

常秋よくつまをくるる花ちる
疎義や似りをるれの形の梅
唇よ星つく兒のすみ家
ゆりの妻乃昭寿の福之の色
法隆寺の家根車を佛のちるを拝ま
いつ迎う雪をまるを吟るる

宇陀法師之書ヲ著ス病死ス年四十五

李由字ハ買年近列之産也居于光明遍照寺釈名亮隅
上人嘗ヲ任律師入蕉門而学風雅年久故韻塞篇突
宝永二乙酉六月廿日卒号孟那觀　四梅序

韻塞序

韻塞序

韻塞序

韻塞序

あるじなる翁の画像屏とうるはしく西皮口笛の軍とひらく蒙と消く雲
となりうるんのちかをと範しし誰と柱とせんと

元禄辛未十月宿明照寺　芭蕉二十八歳

當寺氏平田之地をうつされて百年ばかりや山堂奉加の
辞日竹樹密々土石老ふり渡る木立のみて時移る分ける

百年のけしきと変りの落葉かな　芭蕉

世を捨る人は訪ふて銀杏の落葉かな　李由

象潟のうらとりや大根引
小夫の元禄今念者きいるこゝろつゞ
ふつゝやゝ一めん一修の秋田の稲
宝蔵やゝ大仏を横ふの志賀
大仏しを鍋蓋ひとつのみぞれ
を金ものいふて雪
世変ゆるすゝ蒙あゝ乃守
宝寺をりする杉のあるじ
す挑かいろうつる蕎　梶

春きのふ春の暮きのふの春迄き三年味噌の香ゆ一軒
寺阿やふ入や而ひ金世の梅の花
下茅のけしきを宿や其の雪
世い立の繁を拾ふ柳一ふ
遠きものひとつ京の雪芦
離るものつきし花見ふ
立笠著ばかりそ也や一変者
ふきるやゝ大仏殿乃蕾情声
ゆく変ふ鮑や干鱈のむしり物
部て加茂川の水白法師
簑ゆ立も蒙籠をひや川おろし
苗塚を休ミ茶や茶かゝる
おゝふをとつて町乃夕まゝみ
やき立のめしの白ゆや秋の風
下茅のあるふ始る暑ふ

食の湯よ汗のかるをとゝ
はゝ穂をかて
名月や蕎麦の花てゝ
亡母年回追悼
回年の尼くつをかて袖の露
顔やたて花形ゝ南つゝ
むく花やゝ蕎の紅をおひかけ
秋のみを一こゝ月ひや秋の西
業細の声の中よいさゝ夫婦
蚊の声の中よりも清きゝ蕎麦
田仕事の中も平安れ
病よりて平安れ
苗しろの隙や病後の顔つき　許六
月はの行遊
[illegible]　本蕉
[illegible]　汶村
[illegible]
宇治川のゝ者之位入の

亡總なゝとゝ今の世ゝ
かゝとゝ今我なゝに花笠　許六

支考字、盤子號東花西花、亦號獅子庵、濃州之産也入蕉門
業風雅一方門人也先師滅後遊東西南北説風雅助諸生
故往々慕支考風者多矣中。遇居于勢州山田後歸故國作
誹書數篇辯俳諧之論

濃州山縣郡の人也名勢氏黄雲山大智寺僧錦慈主と云十九
墨下山　東花西花　野盤子　蓮二見龍　白狂　黄山　梅花佛
十一庵　伊勢　獅子庵　享保十六年十一月七日卒　六十七歳
東の坊西の坊と東花坊と西花坊とゝ云ふ附ハ西花坊といふ華の字ゝ栄也光
也ゝ其はゝめゝ東花集西花集といふる東西二集の名よりゝ
支考むゝしゝるのはゝめ其寺の和尚を尼
いろはまゝふゝてちゝめるゝ　師の坊やゝて共賜ゝ
ふのけゝきのあゝき秋風ゝゝ　ゝゝ我伯父の古郷を

おなじく加賀の中心にて孟母なる人の墓ありと聞ハ今の為きくゝゝ生
知の文筆も世にきこゆるなり芳山ゝ小沢丑寅とあるを芳雪といひ
寺を大智といふ鷺見の美濃守の建立なり玉浦一流の本山也
十一庵ハ伊勢の山田にあり庵十一日より暫請出来る分十一庵といふ
支考壮年僧なりし時如迦吉祥なる江湖にあり爰他寺にうつり
時〻深川を芭蕉庵といふ芭蕉庵にて諸国を学ぶ其角嵐雪杉風なるハ
まのあたり俳諧十論をあるゝ武江の芭蕉庵にて素堂禅と
いふ銘をあたへ吉義の行状をあつ〻我家の風雅を弘めんと
昔有婆子供養一庵主経二十年常唫二人二八女子送飯
給侍一日令廿子抱定曰正恁麼之時如何主曰枯木倚
寒山石三冬無暖気女子擎似婆婆曰我二十年祇供養
得箇俗漢追出焼却庵　茶話禅ら素ばなしとなるべ
支考虚言談より死阿離話ゝゝ追善集ゆるま考卒して門
人蓮二あるゝいつるゝなり

やう和ゆるゝ風やうゝうゝ

ゆるゝ長刀のるゝ元こうの
庭のの声おはるゝと何る里
山吹ゆゝ春をゝゝゝ青葉こうの
ゆるや末のるゝ雪の降なの
多のの菓子葉をゝゝ椿の郎
世のの中をゝゝの鶯や子衣
房衣らおのゝすゝゝ帆かけ舟
ゝゝゝ立の花ゝちゝゝす往宴こ申
撰堅ゝ磯ゝゝゝゝゝ雪の糸
ゝを迄らゝゝゝゝ春乃雪
四月村切る廊下のゝゝ系ゝゝ
すゝゝゝゝ風ふむやみの雨つゝ
蕉ゝゝおはゝゝき屋のいちゝ小

四十の春をゝゝ

葉ゝゝゝゝゝ死ゝゝゝゝに花の春
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ法院の往宴こ申
待ゝゝ賜ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
恵山ゝゝ春ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

長刀の五條もすゞし橋の月

草鞋に掃あまる夜嵐の掉のあまりかけて十日十夜ゑ

高山や雲井とのぼる蓮の影

神風や伊勢の山田なる橋氏にかうむりて家を保て
十余年ことしも六十の老を重ねて右の方に福禄のおもひ
をよろこび内外のおほん神にも此心を祝しまゐらするを
そのくへくの別をとくゑいつかはとおもふ八十ますや

烏ニ護ニ増賀夜一

高東一羽鏡にうつし年こもり

花ニ感ニ西行時一

花よさくら洞や帯にかしこまり

贈りて降せきんりさくらう鶯

しきゐにくぐてや猪のぬすみ喰ひ

おぼろおぼろ酒売の名所の秋

時鳥啼ぬ夜も無し熊野山

里の子の乙る掘つる　回くる心の車

是信のくすりみ三年の寒ハ命をくれよ手すりなりのまゝとおもひ
の納涼に扇一本すてせよとまゐらる

かくれつの影ひぢ哉　幾五百

粟の穂をくわへあぐる時やゆらつら

何かしかめしゆく秋の風

刈りよせ行ぬ郷よる小菜留

一霜の寒や芋のずんと草

ひとつ家や一葉くずし秋の霜

みな指て伸げるあし鶴の首

水仙やつと出かし江の月夜

梅が香の端に立よるて一つ日の車

鉢ひらき彼岸にいるる小ぐるま

ちりくるり春や牡丹の花の上

支考が武江を旅立ける時

ゐなかへのみをとせ山さくら

咲花の中をぬけ出て尻つまげ

ならはする旅のおくれや花ぐもる

西国行脚餞別

無くとも精進の友よ海松(ミル)海雲(モツク)

升我

乙州

椒蘭

許六

晋其角者武州江戸産也生医家不学医術終業俳諧寶井氏號狂而堂蕉門之一人而後起己一風著誹書数篇

姓榎本氏母方の姓による竹下東順か子也初名源助といひし時八神田におゐてはまゐり宝晋斎ら米芾か硯に鐫するの字なり

晋子螺舎雷柱子 佐川有竹居狂雷堂 狂而堂 六病庵

善哉庵　宝永四年丙亥二月廿九日卒

類柑子　晋子終焉記

李白鯨に乗て汗漫の風にあそひしも酔中に月をとつて家放乃気を述ぶるものなり今や晋子三年の病根ふかく誹情に富て我をあらはし奇を吐顛をとき人口に膾炙する句々皆すゑの世として二月三十日はてたるもとの泉に帰る倦情よる不知る冥のうちの宴の淵にまさるは誹灯の光をうしなひ余多あつて莫逆のちなみをなしたる此月廿三日宝晋斎にて膝をいれてき友吟し侍りけるに

春曙宋妙坐の唫として

鶯の暁さむしきりぎりす　其角

筧の氷践むすゝみ侶　、

茶草に晋請の日従びやらん　青流

淡黄なる角の色ひかゝらく　、

月も結ぬひとり棒へもつりおく　角

風のかけくる留の番よみ　流

唐の遣大草郷に立やうて　角

洞さる々々剃とつくろ　流

うすまのまく水にあふれ九条縄　角

一摩亥の刻に晋子捐舘きけきさ別ともぬ先を生おおさめの吟なり今思ひあはすれは春鳥にかへしひびて秋の気を感し竜渓禅師の九条縄の水雛にあまこのひし水中の天の一句古今背節の悲しつのあく屋梁落月の光さしては古友の顔をおもひあつてまみにたるれはなり

先立しと年ちるもさくらかな　青流

草の葉に命をつむ涙かな　其角

嵐雪者服部氏不知何許人業風雅遊武江戸蕉門之高弟也
後別墨出家
雪中庵玄峯居士　雪中庵の号を他ようよむ
雪のうちの芭蕉いつそうるかちとつをうちて雪中庵の号を
加もらう　宝永四年丙戌十月十三日年歳五十四　駒込常驗寺に葬
三夕の内定家
新あらるる笠屋の秋の夕ぐれ　嵐雪
松風を甲斐なき恨するしくれ
そ毎をとうるる
五月雨る我ものしや母恋

自画自賛すて下ゐ小杉一枝
手中独くて画をうるはしみ

其角

我庵や[illegible]す八重の青鬼灯
閑さや[illegible]つくろひぬ蓬の門
あ[illegible]
[illegible]

辞世

一[illegible]　吐一[illegible]の上

野坡、越之前列人生、高家居、于武江戸、蕉門之学者也一遊、西海、不定其居所、隨師得山炭俵之撰号、
はつめしをたひの[illegible]浪花之住仏樽木社と号す老後先師の
[illegible]庵を高ほ[illegible]高ほ[illegible]の義と称せり死去の
年月を[illegible]蕉門の徒之附合の句を[illegible]
[illegible]

[illegible]や朝鳥
[illegible]
[illegible]顔の出[illegible]

あ[illegible]
[illegible]
猫の[illegible]
七[illegible]や門[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
人声の[illegible]
[illegible]
あ[illegible]
[illegible]
[illegible]

北枝者加列金沢之人也業磨工見蕉翁好風雅北方之逸士也
立花氏うて金城の磨工牧童の者也祖翁其謦咳を感てか
方の逸士と号し俗姓三郎吉と
和辰集の序に
立花氏北枝を袖うて終志八雲の

雪中庵嵐雪自筆のうた

公義自画自賛の画

一つ二つ三つ四つ五つ六つ七つ八つ九つ十

仏我家流

雪舟

八徳乃海

雪乃庵

芝八翁画

家流写

ちりあまとんくのたかくせうもとりあつめてくく

四方より居るや春の花ちりて
妻のくめ松風ゆくく雪の上
橋桁や日らさしかゝり夕霞
　夕ぐれの鐘や蝶の立をとんとて
めく鹿あとてゆくらの立胡蝶
湖や心はしりく四方の春
風流の留守なるらん山桜
とまかくよ胸さくあまの桜かな
牡丹咲て心にまいれ別きかな
淋しさや一尺滑りて行あとる
舟行の志くくさを蓑の月
　ある蓑を送りて
白露のまとあつみのゆかりなれ
秋立ち咲きくてそ花みられ
　四国の山ゆきを伴ひおくりて
夏ちそ坊主つれてかすひかれ
牆埒や我行く萩の枝

小枝

　山中の温泉にて
石を拾て湯の月聊きよらにす
　我多
秋風や息災て見て人なり
冷るかおぼえし夜もすがら手
十月や降らぬ時雨と名をかへて
おもしろきなくてぬるむ神楽かな
ゆまやる人は廊のお月の月
於牛目やさすらふ秋の風

涼莵者勢州山田ノ神職ノ人也。葉ニ風雅ニ初號團友
号神風館、蕉門ニ遊んで乙由と名を等し

二の花ふかき鳥かなり太つ秋の春
市中やるよかけ出ていつのかり
菜の花のあるしや庭に足なれは
鍬さけて叱るやたかの花
細くて志賀の都の牡丹かな
一ひらり秋鳥ちかし つくみあり

涼莵

きぬ〳〵ときこえよろし実生葵
夕くれハいつもあはれを秋の海
青き実をきんと結して柚味噌かな
ねらけやいろりの火に捨て不斟
孫ざめねぶの里も此辺りまでて
こゝつゝきを唄つきの浪迄し
川音につゝ時々鳴る千鳥　鰍　この郷
啄木の古寺も寂し　杖　花
蘖とつとあるらん花の笠
種まきの俵や寺に置おどし
瓢たんの夢や露をはかりし
蝉鳴や川に柳の木のかけり
新田のはのまつりや駒乃声
昨夜の事の花ふるかな
樹も我庭にみせむ梅　範
てらしく〳〵蓬一もとり給ふ　この郷
七夕のたそかるゝや市の灯

男世帯のやすけなさ
あの月に四五服つや玉霰
実にゆかしき月に傍の猪　この郷

露川者伊賀之人也生テ二商家一居テ二尾名古屋一好二蕉門之風雅一

鶯や巣をかけかへて揉る荒陪　露川
中将も落つゝ鳴らゝこの里
出来町の古き店は蔵の郷
正月も出くる蝶さし猫の恋
ひらりねやせんへ来るかるゝ(?)
炭火を積る鉢して魚(?)の郷
五器皿も皆塵かなし人の霜
汐こちて上みなりや舞雲雀
柿包むよりさなしや村時雨
栗ぬらや庭にかゝよるく野の秋
山椒や稲の田つゝのきんさ傘
どうやら算をつくらぬや　山芝

くらかしぬ花や珍蜀よ咲る日
常とかけと卯月乃別とこの婦
缺くむよ推して見える小庵らの非
花よ花ていろのるかと色るの夏
時る鳴や志つこのに昔の菴

支考餞別

見送りん花も雲つも坂見坂

芭蕉翁よはしめて逢つる時

見そくるなりて本の楷ふ
小春よ首めくしとくらのむし　蓑

雲鈴者奥州南部之人産武壮年入道自號摩詰庵婆
旦人風雅師東花坊一渡佐渡島著入日記

雲鈴法师行状記

其傳よいふ雲嶺法师ハ支考つくと成て鈴の一字を改奥州南部の産よしく
なにかしの侍郎なりしか官るの塵よ世をいとひ始る武陵の

雷桂子か風をあるひ中ころ湖東の五老井よ社をむすふ侍るもあり
侍るもあり酒をこのみて色をぬすまさるハ較沢の隠者よ似らんと
も年ふろく西ろる所ハ彼飲中の謫仙よやと其ころの人らたゝふ
れ今ぬ中宮享保のはしめつかた越後の出雲崎よ草庵をむすひ
うす白の老を養ふへきに高田直江の風雅をあつもひ梅嵜よさ
まよひ秋深よ揺ひろ気力ますく人よ逢つれハ酒よ世界をこえ
やあって果るよ月のさくひを立て世らはさはらへかさうと二月二日
らんとこの志さしきんくをかこらひ旅やつの物をさくせて二月二日
のあ旦よ髪をり出あひし衣裳をも改てりふ人ふとあて本ん
へきぬありと例の我その人ある弾て桂も盃を枕籍るる中寺
我ら今此樋よ入て一生の親法をとけんと云ふ梅我息のゆへなん
のちらくも加くも弁ひゐらはといひあへきる二ツ三ツかきて其残のほす

辞世　お代らあの世を二月二日うか

さふと一生のんくハ見るのかぬりふの酔くらひや治療の名論のさの
とあらハおのれも酔いひるつとし思する人くもあさらめく
人もありしら年の時半よ息くくて酔つる色なとさめけ

らよりて移るなるべしと
世俗世を説あり今百ハ
世代をゆくや　浄土の　ゆくまを
東日記云
水波や雲鈴法師茶枕や陰風と定て者や尚雪青橘の二老人ある
こゝ高堂にあるべし我ゝ高堂にあるべしの共のこゝなんやゝめ
日日記云考ゝ高めるさまをつくるゝ
雲鈴は世間をゆくして餅もやき茶も煮つ色し
葉鍋　おくるまとるやきりくれ　雲鈴
雲鈴　鍋沒は珍鍋別
ゆくゝ燒て行人ありやゝの樽　許六

吾仲者洛陽人也居于六條葉佛画好風雅師李由號柳後園著柿表紙三卷

馬戈人　百阿佛

文操　柳後園盈著　馬戈人

柳の雨のおくるゝハ　くるゝ心のかゝるやら
花のさくゝも花のあるも　世間の蛍ゝまあすや
七夕賦和讃三首　る阿佛
星の別ひも天の門は世をかゝもあの蛍の橋甚曉をおりてそなかる
賦ゝ者つけゝ　星のやゝの花やゝる玉のすゝも青丹よし
其ゝゝ多ゝ仏ゝ其ゝたきゝ賦ゝ　星も花のきゝ
一生涯の秋の袖きゝ泪ゝゝきゝ　ゝ義の朝顔賦ゝ
わゝけや　たゝゝゝ声　のなゝゝ　貴
六條の豆　越の沈法や　おゝ雪
わゝけを　嗅出ふゝ　月の宴
五月雨や　風つゝて来て　戸を　叩
ある智恵の　あゝて　咲ゝゆゝの花

路通者不知何許人不詳其姓名一見蕉翁聽風雅其性不實輕薄而長違師命一瓢泊之中著俳諧之書

俳道をいつれの所にかなるとも定まりしは敦盛の人の下に
おくりしを篇迫に行脚の時の加賀にてよめる俳諧の詠に乃ち
卯月のなかばを歌一首爾よりて篇を立ていやしくもかくの
ごとくなれば世を旅のまくらにかいつる草の枕なるべし
篇終に曰我いまこ君家に住つゝ万治の春吟の歌枕を叩き蕉行
の跡をさぐりて今は俳諧のみちを捨て生涯のこゝろのみを俳道
に従て事とせるこゝを作者の情深く其俳道の者をあはれむ

大切と雲こそつゝめ今うの月　俳道
芋のやうやまぶかく長よりあるる
い林〳〵と人よいそつゝのふる
ほゝきに笠ぬぎかくる牡丹の郷
つゝ捨てふゝ仕かくき名葉の軍
ちつをやもえ雪のて隣　まて
元朝や行くなるふと迷さうろ
こゝろもうへやらの白きはものるものつる
時の第をえをうあるはかるふうう

珈乃菓乃こゝろ　蕉あく　吠乃意
草庵を捨て出る時
きやる時を水る　清てはる也
大佛乃こゝろは花の壁　二の郷
鉢〳〵き　叩きおさめの杖を乏む
肌のゝ子　石の移ふん　花乃山
雅俗はまく
庵〳〵さい　いくつ　面白演の芦
乃海の知なるはは世義のちおちなみて級者
芦のえ雨て定てはは雪よやすらはれ　其心さ人
むる〳〵ふ八予ゝつ作ふて古義の月乃さ
あゝう作ふいゝあめやとこのめ〳〵
を中林き迎音を作ふめ〳〵なつうき世の明
くひるつるきおのひなるふと志きうなるふは
ふるふくるやむかゝの林やすめ

凡此者加列之産也業醫居スル于洛一学蕉門之風雅一罷事
不知其終處

次　ほのおまや空よ　月ひとつ　凡此

年の子乃力を離るゝ事なしとて

蓬掃舎にて

豆植る畑も本部屋も秋寒し

吸うへすす鮒賣ありあるを引

大年をおとゝしの年の歌の形

れも也 近畿

西東 ものかけろふ千法乃系 許六

三系堂者山口氏也居于武陽避世路隱于深川友蕉翁善

今日庵始信章之末雪 享保二申八月十五日卒七十五

山口氏江戸の産也李吟の門より捨て謝道の達者よりるのちの主

あるを辞して深川の別荘に蓮池をかりぬ友を集て晋の惠

遠の蓮社に擬せしより謝象と号し人を社中と称するもかたよりし

其俳集已九月十三夜於園中十三唱

其一 今年やゆ秋の月ゆゑ夕べ雲雀のさつるとく

遠山もとの園に動きゆるやうて花の月の寝もそなぬ

富士颪波二枝の月を一枝に

其二 寄菊

あのくしやこ枝の月や菊そゝ

其三 寄茶

紅を引て唐茶より月の湯殿に

其四

吉るゝ心わ月の中こ枝

其五 寄蕎麦 月に蕎麦を占ふ中文字

ゝゝゝゝ我こはを占ふよりかり

月九ゝ赤あめの蕎麦より花ひそつ

其六 畠中に霜を待氏あり試に筆を立て

ゝ風ゝおりゝゝかゝ月ゝゝ

其七 同隠相永と号心を

むくの赤ゝ鶏ゝ月ゝ我

其八 寄芋

萩 鍬ゝゝゝゝゝ月の落ゝ

其九 寄蘿

遠くゝゝ月に這かゝ赤色の落

其十　水一月千水千月と古るまゝすがて
我身ひとつの月を問
袖よつまにやあらん哀　月いつつ

其十一　春　柳　絮　柳の糸のゆふ
月ひとつ　芭蕉翁

其十二　寄芭蕉翁
きものゝうらひら彼竜よ月をとてれひて我のうちつゝ
しの傳あるゝあるさらなの月ゝ陰てホ夏の
月もきくきぬるゝ係しけらしゝ今もゝ又月の
そつゝて陰のあり出ませんゝるゝ
しなら月よ肌てや　かゝるん

其十三　園よりゝ帰る
我をつゝて糸糸かつる月ん

樂器画　採雪筆
花太鼓

青海や　古鼓　春の声　素堂

中琴
花やゝ　ゝ　ゝ　

郭公まつ外の葉よりかくれし　や
梁行を人目をうらみ　朴そ
心なき花見のつるやすまるとう
青柳よいつく移る枝の葉の郡
炭をさむ音さへ冴る春雨の
くひめの笑入やつゝ花見の郡
塔ゝよ　千　や　川　寸
盃顔よ　色のそや　蕚の跡
浮涙をうなきの　濁す沢辺ト

荊口者濃州大垣之武士也宮崎氏蕉門故老之士也此節
千川文鳥三士之父也後致仕改名東宇ト

羽ゝとり　花見の音のくゝさ
色のくゝ　ゝ　葉ゝ　や　寺の細
ゝつゝも　や　七夜の鶏の　移さの
古郷よ　う　い　移　あ　ゝ　ゝ　も

牛のよの乃　白　や　後ゝん　ゝ　ゝ　ま　れ
桜　咲　や　ま　ゝ　ひ　を　む　の　鶏　ち　ゝ
移の葉や　蕚　る　か　ゝ　の　あ　し　休め
白雨乃青　ゝ　ゝ　の　青　葉　ゝ　ト
ゝ　ゝ　ゝ　ま　の　中　ゝ　か　ゝ　る　屋
代士のゝ　ゝ　ゝ　る　ゝ　ゝ　る　ゝ　ト

玄来者肥前之産也後隨兄居于洛陽向井氏也中華蕉門之高弟也號落柿舍ト隨師選装後病死年五十三

向井玄勝老人の来のゝ　ゝ　ゝ　の方よ生　ゝ　ち俗姓平治郎治の
長者町ゝすあ　ゝ後よ嵯峨の蕉柿舎ゝ　ゝ　ゝ宝永九甲申九月卒

鶏さゝ　ゝ　ゝ　ゝ　や　夕さゝ　玄来
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　花　盛
甲陽軍鑑をよむ
あ　ゝ　蕎　蕎　の　志　ゝ　の　武　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
池　の　ゝ　ゝ　雪　の　ゝ　ゝ　や　あ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　柳　の　木　の　月　ゝ　ゝ　む　賣　ゝ　ゝ

番匠の人々は俳諧のかなき事かなく入るべしと定るもの

野路やらを捨て十五年
鹿くしいへと毎年雪の門
うるうる笠を別り音ちうる
えるや寒よりつりの志乃第し
山里の松を盗ゆく くひうり
旅寝をしていつもきの松を
ちちうるよ里を畑の事ぬうむ
言潮や海ようくて桜花
ゆうしてあつまる屋よ 海の鶴
りかうり寒なりうり 夷かう

遊女ときはのまうをいそぐ遊女の人
のりくやゆる

寒うりうり世乃外乃あうけり
誰くも東むくらん月のうれ

嵯峨にわかつくをあうく休息仕いなれハ
月ろう音 我里人の菜くん
長き夜ろ 旅章外よ寒ろ
年の秋や くるまあしの十外

去来ろ紙のうへ

須日土芳卓袋 追ひ初中追ひ筆ろ俗冬念 故今る一
人去去中ハ去ハ去ハ山西芳来出使 是ハ雑音輝 随ろハ自
筆乙音一 年ないし号 ある雖史よろ歌ハ吟ハ適亡師一七日 於
ハ霊ハ山 追善ろ 百 韻 首尾 雑 真行 ハ 来 伝 義 備 足 仕 ハ
発ろ其 帝ろハ 傳来ろ 百 羽ろ 文 巻 を 立 中 ハ ハ 文 巻 ろ る ハ ハ 吟

文る夷を嘗よ寒ろ
うきくをくくきろん秋のうハ
せよよせ雪のつるや小雨屋
わろけやくくとくく鼻の先
うあれて山のへするうあろ
きみくれの屋をくるや 稲ひろ
いろくの姫となろう 麦の跡
石を本を眼よ寒る 暑ろ
山崖の里かせもきろくくろ
九重よろ斜ぬ雪乃寒さハ
年もくるや牛の尾ろとの寒のハ

及もひま李吟老人より元師又は世つゝ泥雅傳来る雅物ハ世に出ル
根元去有法師より紹巴より傳る成貞徳季吟元師と傳りし如
斯ゝ重器なれハ名ハ一代等閑ハ用も是に度除
川ゝ童蒙と兼ひ近ひ去る に先年猿養葉撰成就仕吟声ゝ
砂原川より出取去る相成其侭ゝ義仲寺なさ動ひ元師も
門人ゝ中に傳ゝ成に心ゝ也ゝ元師ハ一代に俳侍ゝ
ゝ花模茶俗ゝ也金著なさ成ハ義弟ゝて八ゝ弟ゝ全然隠逸
禅中風雲ゝ行状に侍ゝ傳不傳ゝ不ゝて八ゝ弟ゝ俳に後ハ其物
ゝて八俳不ゝ代ゝ代ゝ俳ゝ并捨ゝ侍ゝ一道立不ゝ彩ゝ芭蕉門
理ゝひゝなひ幸ひに弟其角ゝ為ゝ成に江戸其角常雪
ゝゝて八左右ゝ出ゝ出ゝ出

此迎答に成とは尤に存候
尤に禁令は内々に成候ハ俗士に風流中に和物
志に成候も領分境界に寄に付候ハ雅方に成
雅方に成候ハ俗に付に成候ハ和物に成候に貴
和歌に上意も有之仕尤御歌方吟味に来
夜生に成候に付に成候に成候迎上納に仕候に成候に先達貴雅方に
此領分に成候に付に成候に成候に成候に成候に成候に成候
卓袋土産に成候に成候に成候に成候に成候に成候に成候に成候

十月廿六

白井吉兵衛

松尾宗房　命清判

馬羽文台一脚　黒塗　長一尺九寸　幅一尺三寸　高四寸
　　板厚　三歩　筆立一尺一寸

右之脚銅相義に御季吟翁より先師に相義に和歌重器に
今度拵者に領分に成者に成候迄に成候迄に成候迄に成候

元禄七年甲戌十一月四日　白井吉兵衛

松尾宗房

但二ケ所底二ケ所ハ小指に生松一ケ所ハ小指に成
四方角摸に成　此文台今長書に有

万子者加州金澤之武士也生駒氏號此君庵蕉門之英士也
此君庵水國館　其地ハ井林に河水をめぐらし屋敷を加へ
に成を名を銀といひ系序を此君庵といふ

山路や加賀の国の碑を夕附お　万子
なるより　岩根ふみ　ひとあくや　ゆこ　桜
尊菩提　名のくめるちかの
珠数　男牛の移舟の
おん人の為に
おもふ　新の歌かく扇の
一とせや　解つく的のまれ
花芝　粧に不ふてくるふ

學為者加別大聖寺武士也河地氏蕉門之英士也病死

木導者江州亀城之武士也直江氏自號阿山人蕉門之英士也

師翁称二奇異逸物一

春風や書の中ゆく水の音　木導

はるかぜ　ふみ　なか　みず　おと

春風や堤八上の五吉姉川やと宿しら夜春風やと

さはかぜ　つつみ　やかみ　ごきち　あねがわ　やど　しらよ　はるかぜ

あるまじの青菜つむ嬢子哉

あるまじ　あおな　おとめ　かな

蹴すくふ鼻てらる浜ゆふ那

ふすくふ　はなて　はまゆふ　なん

ろろろ戸の押画よかくや水仙花

ろろろ　とのおしえ　かく　すいせんか

干鮭よくふさうろろ　乗ゝ衣ゝ形

ほしさけ　ふさうろろ　のりころも　かた

冬こもり靜の簡のかころゝ軍

ふゆこもり　しずか　ふみ　かこ　いくさ

冬の月杖を流すあらゝ外

ふゆ　つき　つえ　ながす　あら　そと

鬚ぬくさらの音乃宣ゝ軍

ひげ　ぬく　さら　おと　のり　いくさ

眼八ゝ何と叩くゝ鉢ゝ

まなこ　はち　なに　たたく　はち

やふ入の者のゝゝ嵐の蕉

やぶいり　もの　あらし　ばせを

拂ゝ為をゝく柳の格の邪

はらう　ため　やなぎ　かく　じゃ

きすくふ矢猪をゝ為る邪外

きすくふ　いのしし　ため　じゃ

大弁の門ゝ為つゝ　ゝ　猪

だいべん　もん　つく　いのしし

門ゝ為つゝ胡蝶の志けり外

もん　つく　こちょう　しけり　そと

三味せんの音ゝ空々牡丹外

しみせん　おと　くうくう　ぼたん　そと

花芹ゝ如にゝつめゝ有ゝ

はなせり　ごとく　つめ　ある

角力面の腰の脇ゝ蛇の声

すもう　めん　こし　わき　へび　こえ

禪門の隙敷ゝ嵐ゝ

ぜんもん　すき　しき　あらし

ゝゝ物ゝゝ顔や蔓の花

ものもの　かお　つる　はな

月代ゝ向ゝ　康の明

つきしろ　むく　やすし　あき

月鐘の音ゝ有てゝ白牡丹

つきかね　おと　ある　しろ　ぼたん

きゝゝゝと秋の砧者の格の邪

きぬた　しゃ　かく　じゃ

ゝゝゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝゝゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ掃の尉給ゝ硬ゝ邪

はき　じょう　たまう　かた　じゃ

ひさゝゝに月ゝゝゝもあゝ字

ひさし　つき　ゝ　ゝ　ゝ　じ

やり羽ゝ　ゝゝゝゝゝゝ年ゝ方

やり　はね　ゝ　ゝ　ゝ

本尊の名あらを寺中一堂のうつくしう
まことに花見の客とやうに言
結おのの風や宮中のうつくしう　許六
雛壇のうめて身をやゆ神楽
る佐兵の古あいさつや初横

汶村者江州亀城之武士也松井氏字ハ師蔓號九花亭ト
蕉門之達士也嘗テ能書画繪ヘ師トス五老井ヲ

二月の雨ようかうきや柳うの帰　汶村
桜ゆるやこの大師のまつり日
秋ゆるす春ふくるの日
門雨まるるやハるをの山茶蔵
ちるうくのかうらるきく　指京
苗代をえあてるかつる屋
綿の蚤やうくハをちるうく
ゆ　雨のこつ日のはや茶よの花
ちうくいちうくうう　芭蕉

草叶や蔵の茶すりの蔓いちこ
きみふるや焼　炉よかける蘭の臭
玄冥土うつるすりや雲の俳
中入や西ををつくを一すみ
きうさやるをの妙をの妙の俳
十六夜のけしきうう比良伊吹
降の雪や樹子に葉のつまよう
埋内の根ふるのいくむ松の
篝廣ゆやふをつをを吹うつふう
春百年大工ましや　水の院
汶村一周忌追善
ちうくう　又穂ようう　花すき　許六

毛紙者江陽彦城之武士也北山氏号大雅堂好風雅一変画
圖師トス五老井ヲ

雛水の思を送るや　蕉系撰
又書ゆ繋　ゆふうちのうくつう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

程己者近江亀城之武士朝倉氏号白日堂愛蕉門之風雅

狼の道をつけくる蔦かな

滝つぼ[illegible]

傾城よくしつのしくる秋の雨

埋火や主用の中の夜伺ふ

[illegible]

[illegible]病する八専中や根の花

朱廸者江陽彦城之武士也寺島氏号甘露斎年久の好風雅而入舊門病死之年四十二

一ちきり[illegible]神無月　朱廸

塀ぐらの桐の枯や冬の月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百仲俗姓五助 初金平又兵助 三百石を領す
正徳五乙未年八月廿六日卒 系譜八業戸辞にあり
法名五老井無無道無居士 菊阿佛
癩瘡を病て死す 終焉之偈
一時に打破す屎糞八壺芬芳 臭氣供梵天
十年殺盲驢 五老井百年長房根の跡土瓦川といふるものつゝみけみく
文化十一年 集冊中小に其序の文あり
百年の後人は傳らく凡俳諧の論ら一世の虚度は杖ちまい
へる文章を百代の西行とする先師許六蕉門通流の
いとうるを鉄心石肝の熱をひるかへし天下の俳士をさそ文章
に学を構へ既に義嘱後往来問答を普く諸生の速を晴さ
しめるひとりを西は百年の忌を偶る駅の東の旧庵
を宗かんと其遺徳を高のつゝかりく水鶏の住戸を叩くは
東西南北のより傳ひ来る諸好士をさそ聘るものつる

あつまる雅ひとなり〜懐旧の瞻を干に者半百の莚にあつめ、
さ、彼酸吸の三翁を河の芳ようのそむとおもふ〜は今此節にいと
ア〜のあるつ〜比ら文化十一戌辛卯の花降る日五老井澄
てつく万年よとまさるるを祈り不知弟川の書種らるゝ
き栗の丘の笹根角くんるを指て〜題をなて井さ〜つゝ

荒川逐

菊阿全集其外諸子ゆるる自ら集るゝるるゝ

真白なるかしらの花やとし男 許六
書るるや崖家るゝまる神矢根
餅ちの喉の虞さや山代の春
四方うゝ打ちてさくゝ今朝の春
水上の滝つよるゝや 搗て兎
元朝やうゝ明て 何小紋
脇をを積よ白て難者たゝる
根の雲よこゝろ
元日や板 金谷 山人 日

四方らまつ寺のくるし年男
つる賢の女ら伊勢のつるいやしまし源内侍の
竜ら業式部る筆とら我こそ山のふの声をえ乱
て六とつる春をえて
源氏まる稀る花る春かなれや
二条のはしりを戦くる山麓の雪
高砂よりよりひくさじや詠てめ
坂川の縄よる尉てや摘る菜
芹ゆ花や茅ゆ茅ゆるぬり末履
蕓ゆうの年玉きし陸い蕎
芹焼や紙精進ゆうえうう
摺子本ゆ次まるゆむ印松う形
買立乃足跡ゆうけや春の雪
ひけうる菜園の上やうる北風
雪の笠を出てうんむ春の空
節人や雪をゆ雪をゆ雪を春の雪
節小袖 十三年の春 この郭
春郎や湯女のうゆ京ゆて蕎む

舌まるゆ春ゆ乱や蔵乃蕎
くくくくと猫のよるや 松 花
勘 墨 三日 蕾 や うぐの花
三井ゆ春ゆ倶舎よみ かる 松 ゆ
春ゆ観 僧 寺ら菜 京の宮や 松 花
一村ら仏 光ちゆうう色の蕨
雪の 母の古 菜 やくう色の蕨
根ら 梅ら 松の 梅 木や 松 花
竹豆よ 于 大 根 や 梅の花
松ゆ色や まゆ春ゆみの色ゆう
梅ゆ香や 春の 曇ゆう 淺 黄 撓
梅ゆ色ゆ 濃 花 色の小袖ゆう
芦 蕎 色 懐 日
ゆ色ゆ むかしの色や 梅 花
化粧す る 鏡の中 や 春ゆむ
池の 場 柳の 場 春 ゆ
西 風ゆる 東 近 江の 柳ゆう

めふいろく春のうきを柳かな　鄭結門の柳

鶯の人影うすき春の雨

鶯や飯蒸あらは行し千里

蓮立の目てるくや　朝寒

白魚のしるやまをうおおおし

ちつ手や涅槃を掛る東福寺

斗てるも涅槃のまくらに佛こうる

木佛ら討勝るてう　彩けん像

涅槃会や掛ら為てをうけの

四角ちう　お勝日

さしらこの雉子の遠音や濱行燈

町中やひとをよけて花ちる

てるやひ油商ひ乃　二世寺

冥れの上ちるやすらくてるうの

白河乃冥ちるもむと　鳴雲

ひとをちるてや　鳴雲

菜の花や己吹顔ちるく　雄

菜畑に日の暮ちく雄ちの

八ツ橋や田ちて　年雄

住吉春納

日おとかちるきてるの雄ちの

乃東や　乃ちを出かけの茶屋書

かけちるの中やま鞠の　土ちう

乃東や西堅のめしる　初乃雨

かまちるかや我ちえ我乃影

田つちの　鶴の　鶴の影

ちの京やたちるの乃物の影

紀行

飯粮の糧ち　つちに須磨明石

ちらやすし　菜のあさの　独活曙

菜の花や豆の粉めしの昼ひ

君ちあちるちてをちんいのり

草餅ち鄙の鉄やうす美美

いろはもてあけるる雛二軒
ゆとりとくと二階の雛やらの花
好きもの娘の恋や　雛節句

あるハかり箱のもの金や女雛
　　亜達ゆかるる　ゆるめに

色ゑ見ぬいろる孫や　女雛
乳母いろる今の年や　雛おろし
差とる奉るふるんの旅や　女雛
浦路島汐干ちくるくて　三日の月
出張や給仕ゆるをいるる　乙
七代やいさうひるる石信車
ゆかいろうや系吹れろをるこを
出　代やるの御ろるの乳の人
出代や御ろるくむさ好
四号や四年の好きの新提版
出かいろや量めしけのえ出

こうろうや出響り附の店さし
目出ゆるるるゆきめ職ろ奉用ろの好
鶴宮の鐘のうるうや　花ろう
根条のつくくちちろ　お蟹
鶏ゆるる立ゆくかりて　花えう郭
たるこゆとあく果きめ　郭見ろう

草あるとらるまきものろう他のようろ
やまれもうかろちをからるひめく草も牡丹と
庵とうろて響をるのされ貴ろうろ
ろ位ゆまいるるものハ和歌のとくなるいく
ゆるるひ

妻の徳もおろく出ろう　花蟹
秀孔ゆるハ初ゆ　遠ろん　隠の実
ちるるんろるるくろろ　花　蟹
焼豆　慈弁書なし　や花ろ姫

西の宮奉納
花を吟て　神の草　徳8千早振
我山のさろくハ年ゑ響のろるて痛
ふせろあるるて花見とろう

[illegible]
清水の上より出る寿の水
山伏の[illegible]
[illegible]
蛇のきぬぬぎて[illegible]
和漢の[illegible]
[illegible]
苗代の水よ[illegible]
須磨の[illegible]
石
山のさ[illegible]
[illegible]
[illegible]
大[illegible]
紬
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

伊賀、紙芭蕉
生駒もかくひてすてて　寿の百
宝レまくふ牛のあらや　夏の雨
二番さくもの　春ハくふくう　紙三井
投持ものや　寿の[illegible]日の[illegible]
庭別も[illegible]　[illegible]
[illegible]
上ひ[illegible]
生[illegible]
[illegible]
服[illegible]
角[illegible]
[illegible]
[illegible]
天[illegible]
七[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

青葉よりあらはれくる雫る清流の中
石佛一緒の重石の苔むしめるを
井のうるおひを賞て西の方精進日
什の宴のさんめをはやや時多
柳子葬らるるきくや 部屋
搗臼乃屋のさくや五月雨
彼岸乃蛙の鳴りやみ日
ちるつゆの露ふや四つ色
氏のうるはしの色るや土用丁
和尚くくの寂くくしまる東屋
坂の声や古殿樹の蔭に
さくく彼のさくむや麦の穂花川
里の面や青葉あるるる音
つる新らふ附木の芽恵や麦乃秋
おくくつまの世の中るる 牡丹
くくつまの世の中るる 牡丹
春ふて 白牡丹

井のうるおひなるくくし 根岸稲
時ふるるくくや四つるの 屋の工
新田夕田豆田又田やあくぶ
腸立の佛のきくや 時多
思ふめの春くぬ立や 牡丹
と掛ふ芽ふて待て 牡丹
なつくくや新芽院乃ほくまし
白川を赤舟や 京都あくまし
紀の水乃客 日なくや 時多
下泉ふ大くきくや 部屋
寝よりるくおそ——清くまま
まつ時やや東坡の青子 時多
みくくあをるのむくさせや 芽よの芽
みくくあをなれい赤食らくせのよ
まめ一の百るのるのの赤四くの角
五老ふるくつて
井宅のあやめる赤の雲くの

あやめふく女房のあるやるとむ
あやめふく　粽の長の半つくし
時の事なる　考や　粽の考　秋一
立さくちもきの中やたなれる
さみだれなるかるや　本書　本狂言
燒　刈　蒲　天象　天文　日雨
さみだれや　ぬれ　姫　あふる草の庵
鉦の緒の　掛　うろや　五月雨
天蓋　誰　逆　る　食の花
青瓜の　吉　葉　なる　ぬ　るさよ

病中吟

紫蘇の実ふや　土用のうなぎむ　於る
何ぞさん　なつ　苏る
夏狩の　笛　を　ゆく　や　ゆるる時
ゆるめのさみだれ　製　や　ゆるるる
親書　屋つきむけて　田植うゆ
めしかる　物の出立　や　ゆるる時

大名の愛の花ふる　や　ゆるる歌
ゆるる時　ゆるる
八橋　十ふとりくる　田ゆるる
ゆるる見　をさかるゆる　ゆる可
笛吹　乃　ゆるくふる　の　鶴
ゆるる　や　書　ゆるむせる　咽の音
ゆるる　種　つくる　大根畠
ゆるる　や　雲　や　百姓　乳の雨　や　ゆる
ゆる　や　ゆる　ゆるけ　百姓　大郎　百根　法郎
ゆる　西土　用　中　ゆる
大佛　や　接　服　あけて　土用干
土用　海　服　てひろる　雲　ゆる
かるる　似　て　深　や　ゆる　乃　雲
狼　ゆる　さく　や　ゆる　麻　中
ゆる　ゆる　小　傳　ゆる　ゆる　ゆる　葉

あつめをして奈良茶風

陸奥大納言はあまりの肥ふとりて夏の間出仕をしめらるゝ丸髷なれば宇治の格式よこすり往来の物語ことさらに宇治指遣これなり

真葉ゝゝ肥る人の丸髷

押ゝて風ゝゝ顔や牧童の笛

世よ夜あハゝくの風ゝゝす西風ゝゝ

蚤蚊の星ゝゝありうとゝろてん

蟬の声ゝゝて涼しゝ高田馬

桐の葉よりゝゝ蕎麦の声

信濃路や縄を吸ひて疫病所

五老井の亭をまゝ彦根の地ゝゝ

天井ゝゝ井のまてすゝゝ五重塔

くゝん登ゝ八つよくりて暑ゝ

物憂の風ゝ碎るあつさゝゝ

大寺を仰めて涼しゝ

六月ゝ句作なし　や　人食の蚊

已うまむ袖を覆て夕涼ゝの

あつい夜ゝ絵領ゝゝる水ゝゝ

風呂の指ゝつまむや加賀菓子

盂蘭盆ゝ

夕空や花の灯籠の影ゝゝ

夕涼の仲ゝきハゝゝ首ゝ

須田町のゝゝつの世ゝゝ

秋ゝゝなゝの秋ゝゝ

上弦のちゝゝゝ秋ゝゝ

七夕や平仲ゝゝの月あゝゝ

七いゝゝ人ゝゝ　や　月ゝ　祭

遊ゝゝ陣の月あゝ　星ゝゝ

夕ゝ陣　夜のゝゝ　星ゝ

星会をすゝのゝゝはや　あけ紙

浮会や日　牛ゝ　いくめゝ

天文者の天紙ゝゝ天のゝゝこのゝゝ

夜題や　引ゝこゝゝ　天ゝ川

[illegible]

油乃せぬ星の光や　銀河

地ゑ四ゑ乃糸や四絡の玉まつり

四ゑ霊ゑ落葉ひとく　かけ絶絵

精霊のふく〳〵為ゑ　柳　苔ゑ

精霊ゑ　あ〳〵を加られて　旅ゑ

金ゑる　紙ゑ文ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

傑まゑゑ　帳子　唐衣や　墓所絵

夕めく〳〵ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

やふ入ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

送り火の　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

下ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

角力の　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

十六夜や　おくれて　遠ゑる　駒迚

秋ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

立ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　駒　迚　張

[illegible]

[illegible]

代ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

葉ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

御田の　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

辰ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

七月や　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

市中や　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

万月　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

掛　鉢や　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

きさまし　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

鬼行の　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

きりぎす　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五老井
真寫

菊阿全集

城南ヶ原村と
りよ小里あり
此地ヶ五老井
あり民家のつゝ
をおもゝ屋の
ひくさゝ
田舍ゝ人
のゝしき地也
るなり

比良

三上山

五老井

和信る雪井そるうの中ゆ[illegible]のとハ定ゆ々の
いひ捨うて下らすおのゝ和こゆの[illegible]の夕
ふゝ俊書紀うよみつきゝゝゝや仏書うて世て
我書ゝゝゝゝゝゝ心去をふをかて
ゝゝゝゝの仏書を
ゝゝ

高島や湖ゆ中ゆ雪のゝゝ
初凍や周防茶屋の濃ゆ
ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
本郷ゆ[illegible]の大工の音こゝ所
若くの番所ゝゝ比叡の山
湖老ゝゝゝゝ氷ゆゝゝゝゝゝゝゝゝ
綿帽子の郷のちゝゝゆゆの縄
かゝゝゝする二十四孝や凍新
一ゆよ二日かゝゝゆゆ
仏ゆゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
仏ゆゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
初ゆ十三ゝ

鍋ゆの後ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
行燈ゝ水茶ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
大根ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ湖水の音や地侍
梅ゆゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ老ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
十夜の松の天気や清見寺
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の解の上ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
大ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
町ゝ卿ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
題ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

風俗文選大註解　卷之壹上卷

蒔田亮板